研究紹介

自立と共生

自立と共生を図り、実践的態度を育む教育の推進

～組織として十分に機能する特別支援教育の推進 ―体制整備を進めるための校長のリーダーシップ～

萩市立三見小学校長
岡﨑　茂邦

一　はじめに

だれもが安心して暮らすことのできる共生社会をつくるには、一人ひとりの子どもが互いに協力しながら、様々な課題に力を合わせて取り組んでいくことが必要である。そのような実践的態度を育むためには、特別支援教育の視点を取り込んだ教育推進体制の整備が土台となる。そこで、これまでの特別支援教育体制を三つの視点から振り返り、組織として十分に機能する体制整備を進めるための校長のリーダーシップについて研究を進めてきた。

二　萩・阿武支部の取組

（一）研究のねらいと研究の焦点化

研究部会で、特別支援教育における校長の責務を確認し、今後の研究の焦点化を図った。

・家庭・地域との連携
・教員の専門性の向上と児童の支援
・特別支援教育体制の整備

（二）グループ別ワークショップによる検証

これまでの各校の取組を振り返り、特別支援教育体制が十分に機能しているのかを検証した。検証の結果、次の二点にしっかりと取り組むべきであることが明らかとなった。

・実効性のある体制整備の推進
・教員の意識改革

（三）「指針づくり」の取組

実効性のある組織づくりのために「三つの指針」をつくることにした。グループワークで指針を作成した。指針活用は教員の意識向上もめざしたものとした。

・連携の指針
・校内研修の指針
・校内コーディネーター活動指針

作成後のアンケートから、この指針作成は、校長自身の研修としても役立ったことが分かった。

（四）「指針」を活用しての校長のリーダーシップの検証

各校で、「指針」を活用してさらなる体制の整備に取り組んでみた。校長の働きかけでどのような取組が行われ、どのような成果が上がったのかを発表しあうことで、「指針」の有効性や校長のリーダーシップが検証できた。特に以下の項目の有効性が評価された。

・地域行事への積極的な参加に向けた環境づくり
・一人ひとりを大切にした居場所づくり
・障がいの理解のための校内研修
・特別支援教育関係の情報の収集と提供
・特別支援教育の理解、啓発の推進

三　校長のリーダーシップ

「指針」活用の実践発表を分析したところ、今後特に、校長がリーダーシップを発揮すべきポイントが明らかとなった。

指針づくりワークショップ

○　校内組織づくりの具体的指示

校長は、経営ビジョンに位置付けるだけでなく、校内委員会や情報交換会を有効に機能するように組織化を具体的に指示する。

○　校内コーディネーターの役割

校長が、活動内容を明確にする。

○　年度当初の学級づくり

学級づくりや授業づくりに特別支援教育の視点を入れるように、年度当初に校長が意識させる。

○　保護者との信頼関係づくり

信頼関係をつくるための方策を校長があらゆる面で仕組む。

○　障がいへの理解のための研修

校内研修を的確に計画させて、校長自らも意欲的に研修に取り組むことが大切である。

○　実態把握のための工夫

子ども一人ひとりのニーズを確実に把握できなければ、支援計画は有効なものとはならない。

四　おわりに

校長が、前掲の六つのポイントをおさえたリーダーシップを発揮していくことで、さらに組織として機能するようになると考える。萩阿武支部では、今後も「指針」を有効活用しながら、児童の自立をめざした特別支援教育体制を整備していきたいと思っている。キーワードは「組織化」であろう。